

ベートーヴェン《不滅の恋人》研究の現在

青木 やよひ

《恋人》書簡の文献資料としての特長

ベートーヴェンの死後発見されたいくつかの自筆文書の中で特に注目され、後世の研究者によっていく世代にもわたって検討され議論されてきたのは、一通の恋文であった。

これは、ベートーヴェンの死の翌日、彼の遺言書に記されていた有価証券を探していたシュテファン・フォン・プロイニングが、カール・ホルツ、アントン・シントラーと共に発見したものだ。それは有価証券の入っていた人目につきにくい秘密の場所に、女性のミニアチュアの肖像画二点と共に、しまわれていたのである。当初この手紙はプロイニングにより保管されたが、ほどなく彼も死去したためシントラーの手に移り、彼によって 1840 年にはじめて公表された。

この手紙が関心を集めたのは、内容が他の書簡には見られない愛の昂揚を表白しているにもかかわらず、書簡の三原則ともいべき、いつ・どこで・誰に書かれたかが特定できなかったことにある。更には、ベートーヴェン自身がそれらを特定しにくいように、あらかじめ配慮していたかのように思われる節さえある。

また、この手紙が差出人の住居から見つかっていることは、実際には投函されなかったのか、あるいはいったん相手に渡ったのち返却されたのか、二通りの可能性が考えられる。前者では、書き終わったあとでベートーヴェンが思い直して投函しなかった、あるいはもっと無難な別の手紙を書いて送った、とされる。もちろんそれも完全に否定はできないが、筆者としては投函説に立っている。その理由は、この手紙のモチーフが何か切迫した状況にある相手を慰め励ますことであり、そのために自分の気持ちを一刻も早く伝えたいという切望が全編にみちているからである。

いずれにしても、この手紙をベートーヴェンが、紛失してはならない彼の唯一の財産である有価証券と共に、秘密の場所に長年保管していたという事実が、彼にとって相手の女性との思い出がいかに大切なものであったかを物語っている。その女性は文字通り「不滅の恋人」であったのであり、彼にとって最後の、そして唯一の相思相愛の相手だったと考えてよいだろう。

《恋人》研究の前史

この手紙を目にした人々が最初に考えたのが、誰に宛てられたものかということだったのは当然である。そして、生前ベートーヴェンが親しく交際していたと見られる女性の中に、該当者を探した。その結果、まずシントラーがジュリエッタ・グイッチャルディを、ついで A・W・セイヤーは 1879 年にテレゼ・ブルンスヴィックを選び出したのである。この二人の女性は共に、ハンガリーのコロンパ（現在スロヴァキア領）出身のブルンスヴィック伯爵家の一族である。ベートーヴェンと親しかったフランツ・ブルンスヴィックにとって、一方は従妹であり他方は姉だった。1806 年には、ベートーヴェンが彼

らの館を訪れた事実があることから、発表当時はそれぞれの説が信じられていた。

20世紀になって、ヴォルフガング・トーマス＝サン＝ガリが、伝記作家の立場からこの問題の徹底究明にのり出し、ジュリエッタにもテレゼにも《恋人》たる裏づけ資料がなく、むしろ否定的な事実が多いことを明らかにした。彼の功績は、ベートーヴェンが《手紙》に記した「7月6日、月曜日、夜」を手がかりにして、書かれた年代を 1812年、滞在地をボヘミアの温泉地テプリッツと割り出したことである。彼はまた、ベートーヴェンの『日記』をはじめ多くの関連資料を駆使して、この問題について2冊の本を残している。《恋人》の特定には成功しなかったが、当時の「湯治客名簿」や「警察記録」を用いて調査したベートーヴェンのボヘミア旅行の行程の解明は、後世の研究者にとって貴重な遺産となっている。

つづいて現われた少壮の研究者マックス・ウンガーは、トーマス＝サン＝ガリの1812年・テプリッツ説を独特の方法で裏づけると共に、文中の“K”をカールスバートと確定した人物として名を残している。また1812年だけでなく1811年のベートーヴェンの旅程を調査し、それぞれの「湯治客名簿」から関係者をリスト・アップして後続の研究に貢献している。とくに、プラハからテプリッツに至る行程の細部までを明らかにし、《恋人》特定のための大きな手がかりを残した。

その後、ルートヴィヒ・ノール、ロマン・ロラン、ラ・マラ、O・G・ソンネックその他多くの研究者がこの問題にとり組み、それぞれ成果を発表している。その間《恋人》の候補者として検討された女性は、以下のように10人近くにのぼっている。

マグダレーネ・ヴィルマン
ジュリエッタ・グイッチャルディ
テレゼ・ブルンスヴィック
アマリエ・ゼーバルト
テレゼ・マルファッティ
ベッティーナ・プレントナーノ
マリー・エルデーディ
ヨゼフィーネ・ダイム（シュタツケルベルク）
ドロテア・エルトマン

しかしこのいずれの女性にも決め手がなく、20世紀半ばには、《恋人》の特定はもはや不可能ではないかと考えられるまでになった。それは、研究の深化にともなって、《恋人》の条件が細かに規定されるようになり、それまで漠然と恋人らしく見えた女性が失格していったからである。その主な条件とは以下のようなものである。

- (1) 《手紙》の受取人として、7月5日以後の週にカールスバートに滞在している。
- (2) 7月1日から4日のあいだに、プラハでベートーヴェンに会う可能性があった。
- (3) 7月4日に共にプラハを出発して、途中まで彼と同道する可能性があった。
- (4) 旅の途中で別れて、まもなく再会する可能性があった。

(5) 当時ウィーンに在住していた。

(6) 1812年の時点で、互いに情熱的に愛しあっていた。

(7) しかし「いっしょに暮らす」には大きすぎる困難があった女性。

(以上《手紙》の分析から)

(8) イニシアルがAの名前を持つ女性。

(ベートーヴェンの『日記』の記述から)

(9) 1816年から逆算して「5年前から」知りあっており、その時点でも彼が当時の夢を捨てきれずにいた女性。

(ファンニー・ジャンナタジオ・デル・リオの『日記』から)

(10) 《手紙》と共に発見された二枚のミニアチュアの一枚に該当する女性：象牙版に描かれたこの肖像のうち一点は、その後ジュリエッタ・ガルレンベルク伯爵夫人の息子によって、その母親のもとと認定された。しかし残る一枚は、長いあいだ根拠も問われずにエルデーディ伯爵夫人のものとして紹介されてきた。

以上が、20世紀前半までの、この研究についての概略である。

《恋人》研究の深化によるベートーヴェン像の変化

偉大な人物は死後神話化されることが多いが、ベートーヴェンはその最たる存在だったといえよう。超人的で悲壮感をただよさせた英雄のイメージを与えられたのだった。それは、19世紀後半の時代風潮を反映したものであった。しかし、ベートーヴェンの伝記的生涯を追っていた人々、特に《恋人》研究にとり組んだ人々は、その過程で別のベートーヴェン像に出会わざるをなかったと思われる。

その一つの典型と見られるのが、フランスの作家でベートーヴェン研究に大きな業績を残しているロマン・ロランの場合である。彼が1902年にはじめて発表した『ベートーヴェンの生涯』からは、異性の愛に恵まれず、孤独で悲惨な生涯を終えた「楽聖」イメージが立ちのぼってくる。だが、1927年に出版した『ベートーヴェン研究』連作の第一作『エロイカからアパッシヨナータまで』に描かれたベートーヴェン像は、大きく異なっている。この音楽家がウィーンのサロンで常に美しい女性たちに取りまかれ、彼自身「彼女たちを魅惑する特別の力を持っていた」のだと表現されている。もちろん女性との関係だけではない。ここには、かつての「悩みそのもののような」暗い人間像から、自分こそ自分の主人公であるという、フランス革命後の自負にみちた芸術家像への変貌が見られるのである。

25年後のこの大転換は、その間にロランが多くの文献資料に目を通したことと共に、《不滅の恋人》研究にとり組んだ結果と見てよいだろう。ロランはこの問題について二つの論文を、同時期に「ラ・ルヴュー・ミュージカル」などの雑誌に発表している。このとき彼はまだマックス・ウンガーの研究を知らず独自の仕方では探求していたが、のちにウンガーのそれを知って全面的に同意している。

20世紀の最初の10～20年の間に、このように1812年・テプリッツ説が確定したことは、ベートーヴェン研究者にとってけっして小さな出来事ではなかったはずである。なぜならそれは、《手紙》の名宛

人解明に大きく貢献する以上に、それまで個別に検討されてきた《恋人》書簡と、いわゆる『日記』との関連づけが可能になったからである。このことは結果的に、中期から後期へのベートーヴェンの作品的様式的変化を、彼の内面的変貌によって跡づけることをも可能にしたと言えよう。とくにロマン・ロランの場合、それが顕著である。

周知のようにロランは著名なフランスの作家だが、音楽史家として出発し、プロをめざそうとしたほどピアノ演奏にもすぐれていた。「ベートーヴェン研究」中の楽曲分析は、すべて自筆の楽譜で行っている。しかも後年インド思想に傾倒しており、ベートーヴェンの『日記』を理解するには打ってつけの人物だった。彼は、12年の《恋人》が誰か、また彼女との挫折原因が何であるのかは判らないながら、その後数年間ベートーヴェンが陥っていた内面的危機と、そこから立ち直ってゆく過程を丹念にたどっている。そうして生まれたのが、1937年の『復活の歌』だった。前作からちょうど10年経っている。

この本の中でロランは、「ベートーヴェンはこの数年〔1812年～16年〕の間に人柄が変わった」と指摘しているが、彼自身のベートーヴェン観も当然大きく変化している。「われわれには、もう人間ベートーヴェンは、不撓の性格をもった空想的な英雄、不壊の金属で鍛えあげられた英雄といった風」には思われなくなった、と記している。しかし、ベートーヴェンの人間的弱さや猜疑心の強さを指摘しながらも、「彼が自分を偽らなかつたこと、みずから自己を裁いていたこと」を認め、その本質的誠実さが、インド思想やカントの自然観などを経て晩年の作品群の世界へと彼を導いていった経緯を追っている。そこには、ベートーヴェンの心象風景が共感をもって、より深いレベルで読み解かれているのが感じられる。

ほかに、後期への「復活」の先がけともいえる作品101の『ピアノ・ソナタ』、歌曲『遙かなる恋人に』、更には作品109、110、111の『ピアノ・ソナタ』の中にも、ロランはベートーヴェンの音楽的な内面告白を鋭く指摘している。特に最後の三つのピアノ作品については、「ブレンターノという主題の下においてもよいだろう」とまで言いながら、不思議なことにアントニアを12年の《恋人》と結びつけて考えることはけっしてなかった。ロランはその後、『第9交響曲』『後期の四重奏曲』『フィニタ・コメディア』と、亡くなる前年の1943年まで『ベートーヴェン研究』連作の執筆を続けた。

20世紀後半から現在まで

《手紙》の受信人が特定されぬまま迎えた20世紀後半になって、この分野の研究に大きな転機が訪れた。まず1954年にジークムント・カツネルソンによる『ベートーヴェンの遙かな、そして不滅の恋人』なる大著が出版されたことだった。ここで著者は、「遙かな恋人」をラーエル・レーヴィン、「不滅の恋人」をヨゼフィーネ・ダイム（当時シュタツケルベルク）としたのである。

ラーエルについては、1811年にはじめてテブリッツで彼女に会ったベートーヴェンが、その面立ちが彼の「大切な人」に似ていると洩らしたことを根拠に、1816年の連作歌曲『遙かなる恋人に』（作品98）がラーエルへの追憶であると判断されたものだった。しかしこの説は裏づけ証拠にとぼしく、やがて忘れられた。（むしろ、ラーエルに面立ちが似ていた彼の「大切な人」は誰か？の方が問題となった。）

恋人《ヨゼフィーネ説》は、かつてラ・マラによっても提示されていたが、カツネルソンの主張が衝撃的であったのは、1813年4月に生れたヨゼフィーネの末子ミノナをベートーヴェンの子どもだ、としたことだった。そこでは、再婚後のヨゼフィーネの当時の窮状が述べられているだけでなく、ブルンスヴィック家の資料、とくにテレゼの日記などを自在に用いた論証によって、この説が説得力をもって展開されていた。

その後ほどなく、ヨゼフィーネ・ダイム宛てのベートーヴェンの恋文13通がまとまって出現し、1957年にファクシミリとして公表されたのである。だがこれは、問題の年より数年前に当る、ヨゼフィーネがダイム伯爵に死別した未亡人時代の1804年から07年頃までのものと判定された。その間ベートーヴェンが、優雅と無垢を合わせ持つ美女といわれたこの女性に対して、真摯な愛情を抱きつづけていたことをうかがわせるものだった。だが、ヨゼフィーネは結局、当時の身分制度や4人の子どもの母親としての義務に縛られて彼を受け入れられず、ベートーヴェンの方で身を退いたことを示していた。その翌年ヨゼフィーネは長い旅に出発し、1810年には、旅先で知り合ったシュタツェルベルク男爵と再婚している。したがってこの恋文と問題の《手紙》を、直接結びつけることはできなかった。

だがヨゼフィーネはこの結婚によって、さらに二人の子どもと借金を負うことになり、1812年夏には夫の家出により、貧窮の極にいたという。ここから、ミノナ＝ベートーヴェンの子ども説が導き出されるのだが、当のヨゼフィーネを《恋人》の条件に照らしてみると、該当するのはウィーン在住者であることのみとなる。彼女を《不滅の恋人》とするには、客観的証拠があまりにもなさすぎるのだった。

こうした中で、1970年代に《恋人》をアントーニア・ブレンターノとするメイナード・ソロモンの新説が登場したのだった。ソロモンはまず1972年の第一論文で、従来の研究者の業績をフルに活用して、この女性が1812年夏に行ったボヘミア旅行の日程が《恋人》の条件をほとんどすべてみたしていることを証明した。ついで五年後の第二論文で、アントーニアのライフ・ヒストリーを詳しく紹介した。

それによれば、オーストリア宮廷の重臣だったビルケンシュトック伯爵家出身のアントーニアは、イタリア系の富豪フランツ・ブレンターノにのぞまれて18歳で結婚した。だが、嫁ぎ先のフランクフルトになじめず、望郷の念にかられて、やがて重度の心身症を患うまでになる。1809年に父の看病に事よせて実家にもどり、父の死後も遺産の整理を口実に、家族共々3年間ウィーンに止まることに成功した。この間にベートーヴェンと知りあい、1811年末に作曲された『恋人に』が翌年にはアントーニアに贈られていることから、この時期には二人の間に恋愛関係が成立していたと、ソロモンは推定している。そして、遺産の整理がほぼ終わった12年6月に、もはやウィーンに止まる口実を失ったアントーニアが、夫と共にフランクフルトに帰るよりも、ベートーヴェンのいるウィーンに止りたいとして彼に救いを求めたのが、あの《手紙》の背景だと説明している。

こうしたソロモンの論述は広く支持され、『グローヴ音楽事典』(1980年版)でも、もっとも有力視されていた。しかし70年代のハリー・ゴルトシュミットにはじまり、80年代のマリー＝エリザベート・テレンバッハを経て、90年代のエルンスト・ピヒラーにいたるまで、この説に疑問あるいは反論を呈する研究者がその後も跡を絶たなかった。そのもっとも主要なポイントは、不遇なヨゼフィーネと異なる

り、恵まれた主婦だったアントーニアが有能な夫と四人の子どもを捨ててまで、なぜベートーヴェンに走ったのか、という疑問だった。

こうして 20 世紀後半には、この問題の争点は、ヨゼフィーネかアントーニアか、に絞られ、それぞれを支持する研究者の間で論争が交わされていた。前出の「グローヴ音楽事典」では、アントーニアが「時間的・地理的条件をすべてみたしている」とした上で、「彼女の人的魅力や手紙の内容をどう解釈するか」の心理的側面の解明が今後の課題だとしていた。

ちなみに筆者は、1950 年代末から《恋人》をアントーニア・ブレンターノと推定し、そのテーマで文章を発表していたが、当初のものはいずれも一般向きのエッセイであり、その後の著書も日本語であったため、認知されていない。

また 2000 年に、新しい《恋人》候補の出現として話題になったチェコの研究者・故ヤロスラフ・チェレダによる《アルメリア・エステルハージ説》は、60 年代までの研究成果であって裏づけ資料がきわめて乏しい。アルメリアの場合、「時間的・地理的条件」として適合するものがほとんどなく、一致するのは唯一イニシアルだけである。

アントーニアはなぜ見過されたのか

20 世紀末の時点でアントーニア・ブレンターノは、《恋人》の条件である前記 10 項目のすべてを完全にクリアしている。このような女性は、他に一人もいない。しかも、そのうちの少なくとも半分の 5 項目 ((1)(4)(5)(7)(8)) については、20 世紀初頭から知られていたはずなのである。トーマス＝サン＝ガリもマックス・ウンガーも、1812 年の「湯治客名簿」その他の資料にブレンターノの名を認め、それを記録していた。しかし彼らはそれを、単に妻子を連れたいブレンターノ氏の動向としか見ていなかったのだ。その妻の頭文字が A であるということなど、思いうかべさえしなかったのである。しかもこうした錯覚が、その後も 20 世紀の半ばを過ぎるまで、研究者たちに受けつがれていったのである。その原因は何だったのだろうか？

第一にそれは、ブレンターノといえばベートーヴェンにとって最大の恩義ある友人だ、という先入観にあったと思われる。したがって、そのような友人の妻と倫理感の強い彼が恋愛関係を持つはずがないという考えが、第二の理由となる。そこにはまた、恋愛においては男性がつねに積極的にイニシアティブをとる、という思いこみが第三の理由として含まれる。

しかしブレンターノ夫妻が彼の「恩義ある友人」となったのはずっと後年のことであって、1811～12 年の時点で見れば、それは明らかに彼らの関係の読み誤りである。知りあってまだ 1～2 年しか経っておらず、フランツ・ブレンターノは後述するように不在がちで、ベートーヴェンと顔を合わせることも稀れといった状態だった。一方ベートーヴェンには当時、経済的支援を受ける必要などなかったのである。また彼は、当時は、病身のアントーニアに同情をよせ、妻を省みない夫という批判の目をフランツに向けていた可能性もある。むしろこの場合、相手が人妻であったからこそ、自分の感情を友情の域に止めておく自信を、ベートーヴェンの方では持っていたものと考えられる。

一般にベートーヴェンは、身分ちがいの若い女性や人妻に思いをよせ、一方的に拒否されてきたというイメージが強かった。しかし同時代人の証言や彼自身のことばを信じれば、彼は多くの女性たちに愛され、支持されてきたといえる。もちろんそこには、彼の卓越した才能とそれに見合った人間的魅力というものが存在したのはまちがいない。

しかし、その背景をなす当時のヨーロッパ社会における女性の状況をも、視野に入れておく必要がある。17世紀後半に始まり、フランス革命で頂点に達した啓蒙主義は、これに共感する多くの啓蒙貴族を生み出していた。ベートーヴェンの周りにいた貴族たちのほとんどが、この系列に属していた。彼らは自由の気風を尊重し、学問や芸術の振興に力をつくした。当然、自家の子弟にもそれらを奨励し、女性たちもその恩恵に浴していた。ベートーヴェンの人生に登場する女性たちが、高い教養と音楽的才能と、そして多かれ少なかれ独立自主の精神を身につけているのはそのせいであった。

もしテレーゼやアントーニアやベッティーナが現代に生きていたら、それほど苦勞せずに、それぞれの分野でひとかどの業績を残したにちがいない。だが当時は女性にとって、社会的自立の道は遠かった。結婚に際しては、家柄や家産の有無などが条件となり、女性の適齢期は16~17歳と見られていた。結婚すれば、家父長制の下で夫や子どもへの気配りが第一とされ、独立した人格としての基本的人権を与えられていなかった。

とくに女性の人生を重くしていたのは、生殖という負荷だった。厳格なカトリックのモラルの下にあった上流社会では、避妊も中絶も許されず、多産は家門の繁栄の象徴だった。子ども数は平均6~7人、10人以上もざらであった。また統計によれば、当時の女性の12人に一人が出産で死亡していた。たとえば、アントーニアが嫁いだブレンターノ家の先代アントンの場合、最初の妻は6回目の出産時に死亡し、2度目の妻も12回目の出産時に死亡している。3度目の妻が2回目の出産後生きのびたのは、夫がその年に死去したためだった。

こうした現実を見ぬいていた女性たちが、自分の才能と力で階級の桎梏を打ち破り、また彼女たちに対しても打算ぬきの対等な存在として接してくるベートーヴェンに、人間的魅力を感じたということは考えられる。しかも、女性には先入観が少なく新しい芸術を受け入れやすい上、競争意識がない。ウィーンでデビューした当初、ベートーヴェンにいち早く共感し、彼をサポートしたのはこうした女性たちだったにちがいない。リヒノフスキー侯爵夫人やエルデーディ伯爵夫人などが、その例ではないだろうか。またその場合、いささかの恋愛感情が混じていたとしても、それを友情の枠内に収めておく分別が、双方に働いていたと見ることができる。これは、ベートーヴェンにとっては好ましい関係だったと思われるが、しかしこうした微妙な均衡は、状況次第では一挙にくずれる危険もはらんでいるものだ。

ベートーヴェンとアントーニアの関係を考える場合、当然こうした洞察が必要とされたのだが、これまでは、このような視点からの研究がなかったように思われる。それもアントーニアが見過ごされた要因の一つと考えられる。

アントーニア《恋人》説の決め手

こうして《アントーニア説》に残された課題は、先述したように「彼女の肉体的魅力」と彼女がベートーヴェンと恋に陥る「心理的必然性」の有無だけとなった。とくにソロモン説では、「幸福な主婦」というアントーニア像を崩すにいたらなかったことが、大きな問題点として残っていた。1989 年来数回の現地調査をも試みた筆者の視点で、この課題をここで再検討してみることにしたい。

まず、ソロモン説では、アントーニアがフランクフルトで心身症に陥ったのも、また問題の夏に「ベートーヴェンに走った」のも、故郷ウィーンへの強い愛着が原因だとされていたが、筆者は、もっと現実的で絶えがたい抑圧感によるものと考えている。

教養豊かで感受性にとんだ伯爵家の一人娘が嫁ぎ先で直面したのは、20 人にもものぼる夫の異母弟妹を含む商家の大家族だった。そこで 18 歳の花嫁は好奇の目にさらされながら、家長の妻としての役割を求められたのだった。15 歳年長でイタリア系の夫とはなじみにくかった上、近くには頼れる人も相談する人もいなかった。そんな中でアントーニアは健気に振るまいながら、8 年間に 5 人の子どもを産み、その一人を亡くしている。こうして彼女は、25 歳になる頃から重度の心身症に陥ったのだった。現代の目で見れば、アントーニアが背負っていたのはまさに女性問題であり、どれほど経済的に豊かであっても、こうした環境に置かれた女性を「幸福な」あるいは「恵まれた」主婦などとはどうい呼びがたい。

もう一つ注目すべき事実は、26 歳から 33 歳までの 7 年間、アントーニアが一度も出産していないことだ。それ以前の出産頻度に照らして、これは夫婦関係の断絶を示すものと、筆者には考えられる。従って彼女が 1809 年に実家にもどったのは、父の看病をきっかけに、その死後は夫と別れてウィーンで暮らす目的だったと思われる。

こうした筆者の推論を裏づける決定的証拠ともいべきものが、最近出現したのである。それは主に、1809 年から 11 年当時、フランクフルトとアントーニアがそれぞれベッティナーナやクレメンス・プレントナーに宛てた未発表の書簡である。「ウィーンにおけるアントーニア・プレントナー」 《不滅の恋人》問題に対する新たな資料」と題して、ベルリンの研究者クラウス・マルティン・コピッツによって「ボンナー・ベートーヴェン・シュトゥーディエン」誌（2001 年）に公表されたものである。それによると、夫妻の関係はすでにフランクフルト在住時から危機に瀕しており、ウィーン在住の 3 年間にも、夫のフランクフルトはほとんど家にはいなかったことが明らかになった。問題の 1812 年になると、彼は 2 月と 5 月にウィーンに滞在しながら、2 度とも妻の家ではなく市内のホテルに宿泊していた、という事実まで判明したのである。

また、アントーニアの手紙や日記の断片からは、彼女がすぐれた芸術的センスと明晰な自己省察力を併せ持った卓越した女性であることがわかる。そして新しい人生へと踏み出しはじめていた彼女が、この音楽家を、単に作品の魅力からだけではなく、人間の理想像とまで感じて愛していたことがうかがえる。一方、1811 年 3 月のアントーニアの手紙には、セイヤーなどによって後世に伝えられてきた「慰めの音楽」の演奏場面が、まさにこの年の 1 月から 3 月までの出来事であったことがリアルタイムで示されている。ベートーヴェンは、フランクフルト不在のビルケンシュトック邸を毎日のように訪れていたのだ

った。この時点で彼が、恋愛感情とまではいえないにしても、献身的な情愛を彼女に抱いていたことは疑いない。

このようにこれらの新資料は、従来不分明だったアントーニアの家庭状況と心理的側面を詳細に照らし出すと共に、ベートーヴェンとの親交が筆者の予想をはるかに上まわる早い時期から進んでいたことを裏づけることになった。つまり、このコピッツ論文の出現によって、《アントーニア説》は決定的証拠をえた、と言ってよいのではないだろうか。

まとめ

この間の事情を要約すれば、ヨゼフィーネと別れたあと、1810年にテレゼへの求婚をマルファッティ家から拒否されたベートーヴェンが、ベッティーナ・ブレンターとの出会いで立ち直り、それが機縁でアントーニアと親しくなり、1812年7月の《手紙》によって二人の相思相愛の頂点が出現するにいたる、ということになる。多彩な女性遍歴ののちベートーヴェンは、40歳にしてはじめて理想の女性とめぐりあったと言ってよいだろう。それは、1816年5月のリース宛の手紙で言及されている「たった一人見つけましたが」という彼自身の言葉でも証明される。

またこの恋愛が、ベートーヴェンの死後、関係者を危惧させた「不倫事件」ではなかったことも、新資料が証明している。ウィーン時代のアントーニアは、すでに実質的離婚状態にあって自由を行使しており、ベートーヴェンとの親交を早くからベッティーナに告げているだけでなく、夫フランツにもかくしていない。フランツもまた、表面的にはこだわりもなく、その事実を受け入れている。その上筆者の見解では、この大恋愛はけっきょくプラトニックのまま終わったものと思われる。（従って1813年3月に出生したアントーニアの末子の父親は、フランツとするのが現在の筆者の立場である。）

なお、1812年秋に二人の関係が破綻した経緯と、のちに1816～17年に復活しかけて再び諦めにいたる事情については、はっきり証明できるだけの具体的根拠にとぼしい。筆者は『ベートーヴェン《不滅の恋人》の謎を解く』（講談社現代新書、2001年）の中で、ヨゼフィーネ問題も織りこみながら、それなりの仮説を立てて考察しているので、関心がおありの向きはそれを参照されたい。

いずれにせよ、ベートーヴェンが最後の病床で、将来自分の伝記が書かれる際には、「躊躇（ちゅうちょ）することなく、あらゆる点で事実の忠実であってほしい」と望み、また別の個所で「自分には道徳的にやましいところはない」と言っているのは、みずからの良心に照らした信実のことばだったことは疑いない。

それにしても、こうした体験を経た上で、ベートーヴェンとブレンターノ夫妻の間に、「世界でもっともすばらしい友人」と言いうる関係が成立したとは、なんと感動的なことだろう。三人三様に深く苦しみながら、それぞれに人間として大きく成長したことがうかがえる。とくにベートーヴェンの場合、その間の『日記』が残されている。《恋人》問題が解明されたいま、われわれはそこに、苦難にきたえられて、中期から後期の巨匠へと変容してゆくこの芸術家の生の軌跡を、逐一たどることができる。

《恋人》研究の意味とは、けっして名宛人を特定することにあるのではなく、絶えず深化しつつ発展

してゆくこの芸術家の内面世界に、別の道から近づくのに役立つことにあるのではないだろうか。

本稿は、2001年10月16日に本校で行われたシンポジウムとコンサート「ベートーヴェン最後の恋」において、基調講演とシンポジウムに参加するために筆者が用意した覚えがきをもとに、新たに書き下ろしたものである。

なお、インターネット上で公開するにあたり（2002年6月）、若干の手直しを行っていることをおことわりしておきたい。

【主要参考文献】

- Ludwig van Beethoven, Der Brief an die Unsterbliche Geliebte. Beethoven-Haus, Bonn, 1986.
(邦訳付)
- Beethoven. Dreizehn unbekannte Briefe an Josephine Gräfin Deym. Geb. v. Brunsvik, Faksimile, Einführung und Übertragung von Schmidt-Gorg. Beethoven-Haus, Bonn, 1957.
(『ベートーヴェンの恋文』属啓成訳 音楽之友社、1962年)
- Beethoven. Briefwechsel Gesamtausgabe Bd. 1~7. hrsg.von S. Brandenburg, Henle Verlag, München, 1996~98.
- The Letters of Beethoven 1-3. collected, translated and edited, with an introduction, appendixes, notes and indexes by Emily Anderson. Macmillan & Co. London, 1961.
(『ベートーヴェン書簡選集』小松雄一郎訳(抄訳)上下、音楽之友社、1978~79年、『ベートーヴェンの手紙』(抄訳)上下、岩波文庫、1982年)
- Goldschmidt, Harry: Um die unsterbliche Geliebte. Ein Beethoven-Buch, Deutscher Verlag für Musik, Leipzig, 1977.
- Kaznelson, Siegmund: Beethovens ferne und unsterbliche Geliebte, Standard-Buch, Zürich, 1954.
- La Mara: Beethovens Unsterbliche Geliebte. Das Geheimnis der Gräfin Brunsvik und ihre Memoiren. Breitkopf & Hartel, Leipzig, 1909.
- Ley, Stephan: Wahrheit, Zweifel und Irrtum in der Kunde von Beethovens Leben. Breitkopf & Hartel, Wiesbaden, 1955.
- Pichler, Ernst: Mythos und Wirklichkeit. Amalthea Verlag, 1994.
- Rolland, Romain: Beethoven les grandes époques créatrices. Albin Michel, Paris, 1966.
(吉田秀和他訳『ベートーヴェン、偉大な創造の時期』、みすず書房、1970年)
- Schindler, Anton: Ludwig van Beethoven (5.Auflage), Verlag der Eschendorffschen Verlagsbuchhandlung, Münster in Westfalen, 1927.
- Solomon, Maynard: Beethoven. Schirmer Books, A Division of Macmillan Publishing Co., New York, 1977.
(徳丸吉彦・勝村仁子訳『ベートーヴェン』上下、岩波書店、1992年)
- Solomon, Maynard: Beethoven. Second revised edition, Simon & Shuster Macmillan, New York, 1998.
- Solomon, Maynard: Beethoven Essays. Harvard University Press, 1988.
- Solomon, Maynard: Beethovens Tagebuch, hrsg.von S. Brandenburg, Hase & Koehler Verlag, Mainz, 1990.
(青木やよひ・久松重光訳『ベートーヴェンの日記』岩波書店、2001年)
- Sonneck, Oscar Georg: The Riddle of the Immortal Beloved, G. Schirmer Inc., New York, 1927.
- Tellenbach, Marie-Elisabeth: Beethoven und Seine "Unsterbliche Geliebte" Josephine Brunswick, Atlantis Musikbuch-Verlag-AG, Zürich, 1983.
- Thayer's Life of Beethoven (Revised and Edited by Elliot Forbes) I, II, Princeton University

Press, 1967.

(大築邦雄訳『ベートーヴェンの生涯』上下、音楽之友社、1971～74年)

- Thomas-San-Galli, Wolfgang A.: Die "Unsterbliche Geliebte" Bethovens, Amalie Sebald, Otto Hendel Verlag, Halle, 1909.
- Thomas-San-Galli, Wolfgang A.: Beethoven und die Unsterbliche Geliebte; Amalie Sebald / Goethe, Therese Brunswick und Anderes mit Benutzung unbekanten Materials, Wunderhorn-Verlag, Munchen, 1910.
- Ungar, Max: Auf Spuren von Beethovens "Unsterbliche Geliebten", Hermann Beyer & Sohne, Langensalza, 1910.
- Wegeler, Franz G. und Ries, Ferdinand: Biographische Notitzen uber Ludwig van Beethoven, Schuster & Loeffler, Berlin und Leipzig, 1906.